●マイハート		
◇根っ子にあるのはポジティブ感	加藤陽一	2
●教育のひろば 		
◇「話し合い」から「対話」へ	上杉賢士	3
●特集/『私たちの道徳』の活用法────		
◇道徳教育の充実に向けて	押谷由夫/土田雄一/加藤宣行	5
◇道徳の副読本と『私たちの道徳』との併用を考える	新宮弘識	9
◇『私たちの道徳』と副読本の活用と再編	渡邉忠美	11
◇副読本と『私たちの道徳』の調和と可能性	福田有児	12
◇『私たちの道徳』をこう活用する	岡田千穂	13
◇それぞれの資料のよさを生かした道徳の授業	根本哲弥	14
●連載/情報モラルと道徳────		
◇資料とのコラボを考える	北川 忠	15
●新連載/道徳授業の「落とし穴」――――――――――――――――――――――――――――――――――――		
◇「頭でっかち尻つぽみ」	土田雄一	16
●連載/心に残る道徳授業――――――――――――――――――――――――――――――――――――		
◇低学年の道徳授業	加藤宣行	17

本文中の勤務校は平成26年4月現在のものです。

· 絶賛発売中!)

道徳授業ハンドブック

~道徳の"内容"をどのように考えるか~

道 徳 授 業 ハ ン ド ブ ッ ク

~道徳の"内容"を
どのように考えるか~

新宮弘識

道徳の内容項目を、わかりやすく解説!ねらいを明確にもって授業に臨めます!

- ■新宮弘識 著
- ■定価 515円(477円+税)
- ■A 5判/64ページ

※市販はしておりません。購入については下記にお問い合わせください。03-3262-3270 光文書院 営業部

■小社 HP(「お問い合わせ」コーナー)などを通しまして「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひお寄せください。 https://www.kobun.co.jp/contact/



根っ子にあるのは ポジティブ感

加藤 陽一



脚本家は十人いれば十通りのなり方があると言 われていて、決まったなり方はありません。僕の 場合は、最初から脚本家を目指していたわけでは なく. テレビやラジオの番組を企画・構成する放 送作家から転身しました。

このような仕事をしたいと思い始めたのは高校 生の頃。将来についての作文に、『流行をつくる 仕事がしたい』と書いたのを覚えています。当時. 音楽業界で小室哲哉さんがプロデューサーとして 大活躍していたことに影響を受けて。知恵を絞っ て創作をして、それを世にヒットさせるというこ とがとても魅力的に見えました。当時はハマって いたテレビ番組もいくつかあったので、大学に入 る頃にはテレビ番組を作りたいと思うようになり ました。でも、テレビ局に受かったとしても、制 作職に就くことはできないかもしれない。ならば 「学生のうちに現場にもぐりこもう」と考え、マ スコミにツテがありそうな放送研究会というサー クルを選び、テレビ局やラジオ局にアルバイトで 入りました。そこで一番面白そうに見えた仕事が 放送作家。テレビもラジオもイベントも書けて. いろんな考え方や見方を身につけてコンテンツを 作れる。その存在が面白そうだなって。「プロの 構成作家になりたい と問りに言って、ある作家 さんが仕事をくれたので、大学2年の時に放送作 家を始めました。

その流れでアニメを宣伝する特番の構成をして いた時、プロデューサーから「アニメの脚本家と してもニーズがあるはずだ」と奨められ、脚本を 書かせてもらうようになりました。放送作家をや めてアニメの脚本に絞ったのが20代後半。それか ら出会いにも恵まれて、今は*「妖怪ウォッチ」「ア イカツ! | など、シリーズ構成という立場で脚本 を統括させてもらっている作品が多くの方に受け 入れて頂けて。ありがたいことに、『流行をつく りたい』という最初に抱いた気持ちの入り口に来 たのかなと思っています。

「妖怪ウォッチ」と「アイカツ!」に共通する のは、根底にあるポジティブ感。「妖怪ウォッチ」

の場合は、子どもたちなりの日々の悩みを軽くで きたらと。例えば、トイレの大に入ったのを友達 に見られてしまうと本気で傷つく。けど、「たい したことじゃないよ | 「妖怪の仕業かもしれない じゃん 一って、笑い飛ばせるものにしようという 考えがクリエイティブプロデューサーの*日野さ んにあって、そのもとにコント方向の脚本を作っ ています。日野さんと仕事できるだけで嬉しかっ たのですが、実際とても楽しく刺激的です。一方、 「アイカツ!」では「好きなことを見つけられる のは才能 | 「いろんな物事を良いと捉えるか悪い と捉えるかは全て自分次第|「努めて前向きでい た方が人生は楽しい など、楽しく生きる心がけ みたいなものが伝わるといいな、というのが根っ 子にあります。「妖怪ウォッチ」はゲヒンな話題 もありますが(笑)。「アイカツ!」の方はここぞ という時、ストレートに台詞にしていますね。

僕の考え方は海外ドラマで学んでいます。アメ リカの脚本は僕にとって教科書みたいなもの。展 開の早さ・テンポの作り方・ドラマの筋・分かり やすさなどを分析しています。地上波ではすぐチ ャンネルを変えられてしまうのでアニメも掴みが 大事です。オープニング曲が始まる前に,何の話か 分からせることにはこだわります。「こういう話 か、面白そうだな」って最初に思わせたい。考え てみれば思い出に残っている学校の先生も掴みが 上手かったですね。「アナと雪の女王」を見まし たが、すごく展開が早い今っぽい脚本で。僕の捉え 方は間違っていないかな、と勇気づけられました。

車通勤を続けていますが、家でグーッと集中し て原稿を書いてから移動していると、それまで思 いっきり考えていたはずなのに、思い浮かばなか ったことがポンッと浮かんだりするんですよね。 思い浮かんだことの記録法は……ただ覚えている だけです。忘れるようなことはたいしたことない んだ! と。(談)

かとう・よういち

日本脚本家連盟会員。「妖怪ウォッチ|「アイカツ!|「宇宙兄弟| 等多数の話題作を手がける。

「話し合い」から「対話」へ



いいづな学園グリーン・ヒルズ小/中学校校長 上杉 賢士

◆「対話」の本質

Q:この花びんの花を見て、感じたことを発表してください。

A:色とりどりできれい。

A: 生き生きしている。

A: みんなでがんばっている。

A:葉っぱの緑が好き。

A: ちょっときゅうくつそう。

Q: さて、それでは正解はどれでしょう?

ここのところ,「対話」をテーマにした講演な どで好んで行うデモンストレーションである。

むろん正解などはなく、すべてが正解である。 なぜなら、教師は「感じたことを」と求めている のだから。もし仮に不正解があるとすれば、それ は「自分が感じたまま」ではなくて、だれかのま ねをしたり、教師の期待する答えを先回りしたり する場合だけである。

もう2年前になるのだが、デンマークの学校を 訪問した。どこの学校も、とても穏やかな空気が 流れていた。

ある学校で目撃したシーン。中学2年生の子どもたちが、二重の円を作ってお互いにパートナーと向かい合う位置に立つ。しばらく言葉を交わすと、教師の合図で内側の円の子どもたちが一歩進んで、今度は新しいパートナーと向かい合ってまた言葉を交わす。これをひたすら繰り返す。パートナーチェンジの方法は、ちょうどフォークダンスのオクラホマミクサーを思い出せばよい。

彼らの話の内容は聞き取れなかったが、たぶん「今の気分」から「関心のある時事問題」などのように多様なエピソードだったのだろう。でも、たしかなことは、彼らがしていたことは「対話」のエクササイズだったということだ。

今から200年ほど前。後にデンマーク教育の始



祖と尊敬されるようになったグルントヴィ(1783-1872)は、暗記と試験を強制する教育を行っていた学校を「死の学校」と呼んで批判した。「生きた言葉のやりとり」こそが民主主義には必要だと考えた彼は、「フォルケ・ホイスコーレ」という教育機関を設立し、青年たちに学ばせることを提言した。

彼は、「対話(dialogue)」を、「生きた言葉の やりとりを通して、相手を知り、自分を知り、新 しい価値を生み出す営み」と定義する。

デンマークで訪問したどこの学校にも穏やかな空気が流れていたのは、200年も前から営々と積み上げてきた、この「対話」を基盤とした伝統的な風土によるものであることは間違いない。

写真で紹介した以外にも、教師たちはそれぞれ に独自の指導技術を身につけており、私たちは訪 問する教室ごとにそれを目撃することができた。

◆「話し合い」の実際

私たちは、授業の方法としてしばしば「話し合い」を用いる。「登場人物の気持ちについて話し合わせる」「この場面で主人公はどうすればよかったか話し合わせる」など、道徳授業における指導方法の大半は「話し合い」と言ってもよい。

でも、教師が子どもに問い、子どもたちが意見

を発表する場面も、なぜか「話し合い」などと括 られている。道徳の授業は、教師の問いに沿って 子どもが考えを発表するというパターンがすこぶ る多いから、授業の全体が「話し合い」で構成さ れているといってもよいほどである。

道徳の授業では正答はないことが建前になって いる。しかし、不思議なことに教師は子どもが発 表した意見のごく一部しか板書しない。なかには ほとんどスルーしてしまう発言すらある。板書す るのはおそらく教師のお気に入りの発言であり. それが正答である。そして、スルーされたのは誤 答だったのだ。

子どもたちだって長い経験のなかでそのことを 承知している。「何でもいいよ」と誘われても, 簡単にはその手に乗らない。あれこれ考えを巡ら せて、できることなら黒板に自分の発言が書かれ るようにしたいと思う。つまり、正答を探そうと するのだ。

こういう経験がさらに重なると、子どもたちは 次第に無口になる。中学生あたりになると子ども たちの口がとたんに重くなるのは、誤答をおそれ るあまりと考えて間違いない。

◆「対話」に進化させる思考法

「話し合い」というのであれば、みんなで話し 合わなければいけない。しかし、伝統的な教室は みんなが教師の方を向くように設計されているか ら, 教師の顔以外に見えるのは仲間の後頭部だけ である。最前列の席の子どもは、悲しいことに仲 間の後頭部すら見えない。

なぜ話し合うかといえば、自分だけではよく考 えられないからである。それが仲間といっしょで あれば、よく考えることはできる。

「みんなとよく考えた経験をすると、次には自 分一人でも考えられるようになる」と指摘したの は, ヴィゴツキー (1896-1934) の「発達の最近接 領域」理論である。だから、話し合いにはできる だけ違う感性の持ち主が集まるのがよい。

話し合うためには、少なくともお互いに顔を見 合わせる必要がある。なぜなら、発せられた言葉 以外に、表情や手振りなどが雄弁に人の思いを伝 えるからである。即断なのか長い思考の結果なの かによって、発せられた言葉の意味は大きく違う。 言語表現の技術が未熟な子どもであればなおのこ

と、身振り手振りを交えた自己表現は大切にしな ければならない。

「話し合う」ことは、見方を変えれば「影響し 合う」ことである。大人の話し合いでも、長い時 間を一貫して自説を主張する人がいる。でも、そ れはよほど完璧な自説をもち合わせているか、「話 し合い | の基本をまったく知らないかどちらかで ある。前の人の発言を受けて何らかの変化が生じ るのが「話し合い」の特徴であり、それを期待し て参加する場が「話し合い」である。

このように「話し合い」の意味を厳密に定義す ると、いくつかの必要条件が見えてくる。

- *お互いに対面して話すこと。
- *影響し合い変わることが前提であること。
- *話し合いに参加して自分のことが分かること。
- *話し合いに参加して相手のことが分かること。
- *話し合いによって、それまでには思いつかなか った新しい考え方を発見すること。

このような検討を経て、ようやくグルントヴィ が説く「対話」に到達する。繰り返せば、「対話」 とは、「生きた言葉のやりとりを通して、相手を 知り、自分を知り、新しい価値を生み出す営み」 のことである。そして、それは「正解のないグロ ーバル社会 | を生き抜く必須の知恵なのだ。冒頭 の例では、いろいろな感性が重なり合って、花び んの実像に迫っているプロセスが描かれている。

1年前からまた現場に戻って、小さい子どもた ちに囲まれた生活をしている。お互いが顔を見合 せて学ぶ授業の形態には、子どもたちの方がさっ さと適応している。

案ずるより生むが易し。



道徳教育の充実に向けて

昭和女子大学大学院教授 押谷 由夫 千葉大学教育学部特任教授 土田 雄一 筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

<道徳教育の充実のために>

土田:今,道徳教育の充実のために,先生方にどのようなことを求めますか?

押谷:道徳教育が、学校教育全体の根幹にかかわるという意識を教員がもつことが第一です。どう生きるかという「徳」を中核としながら、教育を具体的に考えていくことです。並列的に、知も大切、体も大切、徳も大切ではダメなんです。学力も体力ももちろん大切ですが、豊かな人格形成という視点の中から、知的な学習・技術的な学習・体を鍛える学習がより充実していくのではないかと思っています。その意識改革をしてほしいです。土田:よくわかります。残念ながら実際に子どもたちや家庭・地域を含めたレベルまで趣旨が伝わっていません。どのような課題が考えられるでしょうか。

押谷:いちばんの問題は、「先生方が、どのよう な子どもに育てたいのか | が見えないことです。 もっと道徳の内容項目をベースにしながら、日常 生活や家庭での生活も含めたいろいろな教育活動 を進めるべきです。そのなかで、「どのような子 どもに育てたいのか」といった全体像を共有して、 具体策を考える。そうしないと、それぞれやって いることがバラバラとなって、有効に機能しませ ん。今回の学習指導要領改訂の趣旨が浸透してい ないんですね。今回の教科化の動きは、改正教育 基本法も含め、教育全体を徳を根幹としたものに 変えていくという大きな改革の流れの一環だと認 識してもらいたいです。教育の在り方を根底から 変える必要があるかもしれません。教科の学習. 学級経営も徳育との関連をしっかり意識しながら 行う。そうなって初めて、全教育課程を通しての 道徳教育ということになりますね。

土田:学習指導要領の前回改訂時に,道徳の時間 を要としてということを明確にして各教科や領域 に道徳教育の内容を明文化しましたよね。 押谷: すべての教科・領域に,「第3章道徳の第2に示す内容について,各教科・領域の特質に応じて適切に指導する」と明確に書かれていますね。

<『私たちの道徳』について>

土田:その改革の一環として,文科省は,『心の ノート』を改訂して,『私たちの道徳』を発行し ました。その趣旨を改めてお伺いします。

押谷:『心のノート』が平成14年から使用される ようになりましたが、その趣旨は、子どもたちに しっかりとした学習教材をもとに、自分の生き方 を考えてほしいということでした。もちろん副読 本はありますが、全児童が持っているわけではあ りません。副読本と合わせて、全教育活動を通し て気軽に使いながら、自分と対話しつつ、自分な りに確認・追求していける教材として作成されま した。「一人ひとりの子どもたちが自分らしく道 徳性を伸ばしていく道案内をするプレゼント」と いう位置づけです。当然、道徳の内容項目をベー スにして書かれているので、道徳の時間でも使用 できるのですが、主教材ではなく、『心のノート』 をきっかけとして、全教育課程を通して日常生活 でも使えるように配慮されていました。そのスタ ンスは、『私たちの道徳』でも変わりません。道 徳教育の特徴は、道徳の時間と日常生活あるいは 各教科等での道徳学習を響き合わせていく必要が あるということです。道徳の時間には、副読本や 地域教材が開発されていて、一般的にはそれらを 使って授業が行われるのですが、それを各教科・ 日常生活の学びとどう響かせていくか、なかなか 難しいところでした。今回、『私たちの道徳』の 中に道徳の時間で使える読み物資料をいくつか入 れたのは、日常生活あるいは各教科等と絡めて、 学習を深めてほしいという思いからです。いわゆ る総合単元的道徳のようなとらえ方なんですが、 そのような授業を年に少なくとも3回から4回ぐ







▲土田先生



▲加藤先生

らい、行ってもらおうという提案でもあります。 それによって、道徳の時間の特質や良さが本当の 意味で具体化し、道徳教育の要としての役割を果 たせるようになるのではないかと思います。

学校現場では、これが教科書代わりになるのではないかというようなとらえ方があるようですが、それは全く違います。道徳の時間では、従来どおり副読本などをしっかりと使っていただく。そして、各教科や日常生活と響かせる部分で、『私たちの道徳』を活用いただきたいです。

土田:『私たちの道徳』は、従来の『心のノート』 以上に道徳の時間の充実のためや、各教科との関 連の中で活用していくということですね。

押谷:そうですね。道徳の時間の年間指導計画の中に『私たちの道徳』を使った授業を位置づけて、その指導は各教科の学習とうまく響き合わせることを考えていただく。そうなれば、子どもたちがより大切さや面白さを感じ、自分でも考えるようになっていくのではないかと思います。

加藤:『私たちの道徳』と副読本を併用した授業を行ってみました。『私たちの道徳』には、内容項目を説明するキーワード的な言葉が書かれていることが多いので、副読本などの具体的な現象を考えやすい読み物資料を使って深めていく必要があります。例えば、『私たちの道徳』の「友達の良いなと思うところを選びるところを選びるところを達の良いと思うところを表させた上で、資料で友達の良いと思うところを探させる。そして同じ点や違う点に気づかせて、深めさせる。他にも、『私たちの道徳』を有効に使めさせる。他にも、『私たちの道徳』を有効果的に共存していく具体的な指導の提案が手引きとしてできると、現場では使いやすいでしょうね。

子どもたちには、「これは参考書だよ。いつ使ってもいいんだよ。」と言って配りました。巻頭に、道徳の時間やその他の授業、家庭・地域で使って

よいと書かれています。その部分をしっかり押さ えておくことが大切だと思いました。

土田:『心のノート』改訂の趣旨を, 現場の先生 たちがどこまで把握されているかですね。

押谷: 今後, 誤解があるところを打ち破っていく 必要性を痛感しています。

<教科化について>

土田: 来年度にも教科化という動きがあります。 教科になるというのは、時代の大きな節目となり ますよね。

押谷:昭和33年に, 道徳が領域として特設された とき以上の重みをもちます。残念ながら, みなさ んその意識が薄いんです。教科になったけれどあ まり変わらないということでは全然ダメなんです。

評価も変わってきます。評価・評定を導入すれば、道徳を絶対やるようになるという人もいます。ただ、道徳における評価は、他教科とは意味合いが異なります。4観点の観点別評価は、授業を改善する視点として意識するということでは意味があるかもしれませんが、評価そのものとしては難しいです。道徳の目標が、道徳性を育てつつ実践力を育てるということならば、自己評価を評価するという方式もよいと思っています。

土田:自己評価を評価するというのは、ノートや ワークシートなどを手掛かりにするということで しょうか。

押谷:ポートフォリオのような感じですね。それを先生も見て、子どもが自分自身で自己評価をしながら、考えていく。課題をまたそこで見出して自己成長を図っていくことが理想です。

土田:全く同感です。

押谷:本当に夢物語なのかというと、例えば、いまオリンピック等で活躍している10代後半、20代前半の若者たちは、みんな小さいころから日記をつけて、自分の成長を実感したり、課題を見つけ

たりしています。やってる人はやってるんですよ。 それにはゆとりが必要です。追い込んで追い込ん でではなく、もっとしっかり自分を見つめるゆと り。そして相手の立場に立って考える。自分の状 況をもっと客観的な広い立場から考えていく。そ ういう機会をもたさなくてはいけない。道徳の時 間は、そういう要としての時間でもあります。

土田: 先生のお考えは非常によく分かったんですが、実施まで急ぎ過ぎなのではないかと感じます。 周知ができなかったり、教材の準備が十分でなかったりと、いろんな面で問題が出てくることが危惧されます。

押谷:確かに少し拙速ぎみだとは思います。現場 にうまく周知できるような方法も考えていかなく てはいけませんね。

<教科書について>

土田:以前生活科が導入された時に、教科書の生き物を育てる単元にうさぎがでてきたら、全国でうさぎを飼わなきゃいけないという風潮がうまれました。教科書のもつ影響力というのは非常に大きいと思うのですが。

押谷: 道徳の教科書は、基本的には「素材」というとらえ方です。その子どもにとって単なる素材ではなく、心の糧になる素材です。強制的にやらせるのではなく、それをもとに心を見つめながら、自分なりに考えていく。素材が、自分の宝物になっていくわけです。そういう可能性をめざして、指導の工夫をしていくことが必要です。生活科も教科書をつくるかどうか問題になったことがありましたが、教科書ができたために生活科というものが定着したと思っています。総合的な学習の時間があやふやになっているのは、教科書がないことが大きな要因ではないかと思います。

土田: 今回の『私たちの道徳』は、教科書の途中 にあるものという認識でよろしいですか?

押谷:一部は参考になるかと思いますが、教科書のプロトタイプではありません。道徳の教科書は、今までの枠組みにこだわるのではなく、もっと新しい発想でつくってほしいですね。もちろん、読み物資料を中心にしなくてはいけないと思うんです。その上で、もっと大胆に副読本を改革して教科書にしていく。『私たちの道徳』とより響きやすいような工夫や、地域教材や家庭・地域との連

携,郷土愛などの育成なども重視します。そうなると、自然と総合的な学習の時間や特活など、いろいろなものと関連をもたせる必要が出てきますね。道徳の教科書を見れば、「特別の教科 道徳」が教育の中核・要になっているんだと意識できるといいですね。同時に、「道徳ノート」も必要だと思います。子どもたちが教科書で発展として書かれていることをふまえて、自分なりに発展させていくためのものです。そのためには低学年のときから、しっかりと道案内をする必要があります。また、その大もととなるのは、教師の後ろ姿です。それが教師本来の役割でしょう。

土田:今のお話を聞いていると、授業のやり方とか資料とか「枝」にこだわるのではなくて「根幹」となるもの、どこに向かって幹を伸ばしていかなくてはいけないのか。つまり根幹にある知・徳・体の徳の中核の部分を教師一人ひとりもきちんと意識する必要があるだろうと受け取りました。

押谷: その重要な役割を果たすのが「特別の教科 道徳」です。だから道徳を意識することによって すべての教育活動における実践が、豊かな人格形 成・道徳性へとつながっていく。そういう意識を もってもらえるようになると思うんですよ。

土田:めざす子ども像の方向性が徳。徳によって、知と体が具体的に見えてくるわけですよね。例えば具体的には、勉強が分からなくてもあきらめずにがんばるとか、運動でくじけそうになってもこつこつ努力するとか……そういうもとになるのが道徳です。他教科では、教科書を教えるという発想がまだ強いですが、本来の教育のもとは、「こういう子どもを育てるために、教科書を通して教えていく」ことです。その意識をもう一度明確にそれぞれがもたなくてはいけない。

押谷:内容を教えると考えてしまうと、結局35時間、教科書の中の教材を使うだけで終わってしまいます。これは道徳の本質からはずれていくと思うんです。せっかく今までいろいろな工夫や努力をされて、いい成果をあげていただいた学校や先生の財産を台無しにしてしまう結果となります。行政的な検討が必要だとは思うのですが、私の願いとしては教科書は年間指導計画の中にしっかり位置づけて3分の2は使い、残りの3分の1は副読本や地域・映像教材など、いろいろなものを使って行う。授業で使わなかった3分の1は、いろ

んな場面で使えますよと。そうでないと道徳の時間がかえっておかしくなってしまいますね。

土田: そうですね。私たち教師は、教科書を全部 終わらせなければ……という意識になりがちです が、めざしているものが同じであれば、置き換え ていい。例えば郷土愛というテーマでいえば、3・ 4年生の社会科では、地域学習用の副読本が自治 体でつくられています。教科書と副読本をうまく 併用しながら授業を進めることで、社会の意識を 高めていくというねらいに向かって進んでいると 思うのですが、それに近いイメージでしょうか。 押谷: その通りです。道徳で、市民教育的なこと を行う必要を感じています。それは社会科がベー スになると思うんです。例えば授業の導入で、社 会科での地域学習の内容や感じたことを確認した あとに、道徳で心情的な部分を、ぐっと深められ るような資料をもとに授業をしたときには、きっ と感覚が違ってきます。知ることを通して、内面 が耕されていくんです。そういう授業展開も期待 したいです。

土田:地域学習を行うときに、教師側が郷土を愛する心を育てたいという意識があって行うのと、教科書・副読本に載っているから行うのとでは、感じさせ方・引き出し方が変わってくると思うんです。めざす子ども像やこれを知ってほしいという願いがあって、今のような社会科と道徳・その他の活動が関連していくというイメージでとらえていくのですね。

押谷:各教科の学習は、知識面や技術面に重きが置かれがちだと思うんですよね。学習した内容をどう使うかというのは、自分の生き方や生活にその力をどう発揮していくかということです。例えば、自分の考えを伝える技術には、知識に加え、伝え合う心や思いやりの心、お互いに信頼し合う心が必須だと思いますが、そこは道徳と結びついてこそ意味があります。それが本当の各教科の力ではないでしょうか。そういう意識をしっかりともってもらうためには、道徳を中核に学校経営や授業を考えていかなければいけません。それを具体化してほしいということなんですね。

<人材の育成>

土田: 教科化のスピードが速いので、人材の育成 が急務だと思います。現場にすでに道徳の授業が あるなかで、それをさらに充実させるためには、 教員の再教育が必要になります。それを主導する リーダー的な教師がどう進めるかや、次を支える 人材をどう育てていくのかも重要になりますね。 押谷:将来的には、国立道徳教育研究所か国立国 際道徳研究所のようなものをつくらないといけな いと思っているんです。人材を配置して、専門の 研究所や大学院があって、現職の先生方もそこで 学ぶことができる、国際的な交流もしっかりやっ ていける施設や仕組みをつくってこそ、日本が本 当に世界から信頼され、貢献できるのではないか と思います。

<これからの道徳>

土田:「学び続ける教師」というキーワードがあります。今後ますます教師自身の生きざまが問われるような時代になっていくのではと思います。小手先のハウツーだけではなくて、そのハウツーを使って何をめざすのか。その根幹にかかわる部分の意識をもって、教師が自分を磨き続けないと、先生のおっしゃるような真の道徳教育につながっていかないのではないかと思いました。

押谷:まさに道徳教育はそれが本質だと思います。 つまり、子どもをどう育てるかということの前に、 自分がどう生きるか。親にしても、道徳教育が大 切だというのであれば、どんな生き方をするのか が問われます。そうでないと、子どもにいくら言 ったって、子どもは聞きません。そこにみんなが 意識を向けていただければ本望です。

土田:子ども・教師・家庭も巻き込んでですね。 押谷:そこが重要です。教育というのは夢が託せなくてはいけません。特に道徳が子どもたちの夢を育むものだというならば、「特別の教科」道徳」にこそ夢を託せるものにしたいです。夢とは、理想であり目標です。例えば国語でも算数でも埋想があると思うんですが、なかなか理想どおりにはいかない。もちろん道徳も同じです。でも道徳は、教育のもっと本質的なところに夢を託してやっていきたい。それがうまくいけば、きっと各教科にも、うまく転化していくはずです。今回の改革によって、道徳教育がより充実し、夢を託せる教科となるよう、汗をかかなくてはいけないと強く思っています。

道徳の副読本と『私たちの道徳』との 併用を考える



淑徳大学名誉教授 新宮 弘識

1,道徳の暫定教科書『私たちの道徳』の配布による教育現場の混乱

『私たちの道徳』が全国の小中学校に配布された。何事でも、新しい試みが提示されると混乱が生じるものであるが、学校でも例外ではないようである。

「副読本と『私たちの道徳』の二冊を使いこな すことは難しいのではないか | 「副読本の購入は 控えたらどうか | 「そうすれば経費の削減にもな る | 「副読本の購入を控えれば、昭和33年以来築 きあげてきた副読本や自作資料による道徳教育文 化が否定されることになるが、それでよいのか」 「道徳の授業は、副読本や自作資料等を通して、 道徳的な内面的な資質の育成に力を注いできたが、 その結果、行動力の育成にまで力が及ばなかった ことは認めなければならない | 「しかし、内面的 な資質の育成を軽視して. 行動力の育成に傾斜す るのは疑問がある」「子どもを大人が考える型に 入れようとする道徳教育で本当によいのか | 「道 徳的行動が、自分の心から発されてこそ、自分の 善を誇り、悪を羞じるとする考えは、道徳教育の 基本的な考えでなければならない」等々である。

これを道徳教育の論争というべきか否かは別として,「特別の教科道徳」という新提案によって道徳教育を根本的に見直そうとする風潮が生じたことは望ましいことである。

ところで、この動きが、教育行政的な観点から のみ論じられてはならない。豊かな心や強い行動 力を育てるために、子どもにとって副読本はどの ような意味があるか、『私たちの道徳』はどのよ うな意味があるかというように、教育的観点から 考える必要があろう。

2, 道徳の副読本と『私たちの道徳』の特長と問 顕点

①. 副読本の特長と問題点

本社の副読本『ゆたかな心』は、教師用指導書でも述べているように、道徳的実践力という内面的な資質の育成に力点を置いて編集してきた。他の副読本も同様であろう。

これを子どもの立場から考えると、「よくわかったよ」「そうだったのか」「やっぱりね」「それは大切なことだ」「感動したよ」「そのような素晴らしい心は私ももっているだろうか」「確かにもっている」「この心をもっと大切にして、育てていこう」とする心の育成であったといえる。これを教育的観点から考えると、つぎのようにいえるのではないか。

例えば、優しさや厳しさは、表面的な目にみえる行動であるが、その行動が自己顕示欲から生まれたものは価値があるとはいえず、思いやりの心から生まれてこそ価値があるといえる。優しさや厳しさの「もと」になる思いやりの心は、他者に対する関心の高さがきっかけとなり、その関心が他者の悲しみや苦しみをわかろうとする働きを生み、それが時と場に応じた優しさや厳しさという行為を生むといえる。これは徳(人間のよさ)の関係的構造的なわかりであり、理の深まりといってもよいが、このような学習が、子どもの「よくわかったよ」という道徳的理解の声になる。

このような理が深まると、「感動したよ」という子どもの声が自然に生まれる。それが、善を美しいとする快の情や悪を醜いとする不快の情としての道徳的心情の高まりである。

このようにして,道徳的な理解が深まり,道徳 的な心情が高まると,善なる行為を大切にしよう, 悪を退けようとする実践意欲が生まれる。

道徳の副読本では、このような道徳的実践力と しての目にみえない内面的資質の育成に力点を置 いて編集してきたといってよい。教育基本法の教 育目的としての人格の完成は、このような内面的 資質の育成が「もと」になるのではないか。

しかし、このような副読本には問題点もあった。 道徳的な行動力の育成という教育が充分ではなか ったという反省である。具体的な実践は個別的で あるから、一人ひとりの子どもの主体性にゆだね る以外にないとして、きめ細かな実践の育成を疎 かにしてきたことは否めない。行動を整えること によって内面の心を育てる教育は、「外を制する は、その内を養う也」という*程子の言を借りる までもなく極めて重要な教育である。

②、『私たちの道徳』の特長と問題点

『私たちの道徳』にも、特長と同時に問題点が あるように思われる。

『私たちの道徳』では、内容毎に編集されてい るが、中学年に例をとると、全体の資料数は90資 料前後であり、一つの内容に平均5つ程度の資料 が示されているようである。この中で、従来の道 徳の授業のように、読み物を通して、道徳的な理 解を深めたり、道徳的な心情を高めたりして、善 なる行為を大切にしよう、悪を退けようとする内 なる心を育てるのに適切と思われる資料は、12資 料である。『私たちの道徳』は、二学年にわたっ て活用するわけであるから、単純計算をすると、 一学年6資料ということになる。

他の80前後の資料は、「道徳的によい行動をと って社会的に活躍している人々の簡単な紹介しや、 「人間のよい行為を示して、自分の生活を考えさ せ、それを書き込ませる資料 | 「ことわざや文学 作品の簡単な紹介等の資料」がほとんどである。

これは、「深める資料」というよりも「広げる 資料」といってよい。ここでいう広げる資料とは, ものの見方・考え方を広げる資料という意味では なく. 表面的なよい行動事例を並べ. それを刺激 剤として子どもによい行動を求めるという意味で の広げる資料である。したがって、この資料によ って人間のよさをじっくり考えさせて、道徳的価 値に関する目にみえない心を育てることは、 今ま で以上の卓越した指導力がなければ難しいと思わ れる。

以上の考察を要約すれば、『私たちの道徳』に おける.「深めるための資料」は、一学年6資料 であり、他の資料は、「広げるための資料」であ るといえるのではないだろうか。

3. 道徳の副読本と『私たちの道徳』の併用とい う新しい道徳の授業

以上のような考察から、新しい道徳の授業の姿 は、自ずからみえてくる。

①, 中心資料の検討

従来の副読本に示された資料や自作資料等に. 『私たちの道徳』に示された一学年6つの読み物 資料を加えて検討する。

②. 補助資料の検討

行動力の強化という意味を含めて、展開後段や 終末、『ゆたかな心』が提案している「発展」の さらなる充実を図るための資料として、『私たち の道徳』に示されている。「道徳的によい行動を とって社会的に活躍している人々の簡単な紹介」 や、「人間のよい行為を示して、自分の生活を考 えさせ、それを書き込ませる資料」「ことわざや 文学作品の簡単な紹介等の資料 | を活用する。

- ③. この考え方は、従来の、一主題、一内容・一 資料・一時間という考え方から、一主題複数内容・ 複数資料・複数時間という考え方へ向かう新しい 道徳の授業の拡充を図る考え方であるともいえよ う。
- ④、また、この考え方を、『ゆたかな心』が提案 している重点主題で生かせば、より一層の効果が 期待できよう。

*程子

中国・宋代(北宋)の儒学者で程顥・程頤兄弟。二 程子とも称される。引用の文は、朱熹(朱子)の著 した『近思録』に程顥の言葉としてみられる。

『私たちの道徳』と副読本の活用と再編

元 別府大学教授 渡邉 忠美



1. 子どもたちとつくる「道徳教育」

大学で教職課程の講座を行うときに、大切にしていることがある。一方的に話をする講義ではなく、学生と共有し合う講義にしたいということである。

あるとき、映画「男はつらいよ」を教材にしたことがある。「映画のなかで、どんな配役・スタッフを選ぶか。その理由を説明せよ」と問いかけた。「主役を演じたい」と言う学生もいれば、映像スタッフを希望する学生もいる。それぞれが、自分なりの理由で多彩な配役・スタッフを選び、その役割や責任について本音で語り合った。その後、学習指導要領を開いて、自分たちの話し合った内容を確認し合い、非常に充実した講座となった。

小学校の道徳の授業にも同じことが言えるだろう。「道徳の授業は退屈……。資料を読んで、話し合いをするだけだから。」という子どもが多いのは、残念ながら事実である。道徳の時間では、主体的に考える立場を仕組み、本音を語らせることが大切だと考えている。

道徳教育の今までの流れを考えてみても、ただ 副読本の資料を読むだけでは、限界があるのは明 らかだ。また、年間指導計画通りに進まないこと もある。資料の提示には、タイミングが重要である。年間指導計画を立てた時点では予測できない 状況が発生することもある。そんなときは、子ど もの側に立って、道徳の授業や年間計画を変える 勇気が必要である。

2. 「道徳習慣」の獲得

以前,『ゆたかな心』(光文書院)に『セロひきのゴーシュ』(宮沢賢治著)を2年生の資料として書いたことがある。授業では、この資料を紙芝居で構成した。ゴーシュが観衆から拍手をもらう場面の前を空白とし、それがどんな場面かを想像して表現させた。子どもは自分の経験をもとに、ゴーシュが行う練習方法を主張した。また、友だちの意見で自分の考えを修正・補強しながら描き

直した。この追求は、自分の練習をよりよいがんばりにする「道徳習慣」といえよう。「道徳習慣」とは、あいさつや掃除・思いやりなど、日常生活上の基本的習慣である。よき道徳習慣は、道徳的感性や品性を醸成しながら形成される。その「道徳習慣」を確認し、まとめられるページが『私たちの道徳』には随所に設けられている。しかし、ただ書かせれば、何かが良くなるわけではない。子どもが自信をもって確認できるような授業が併せて求められている。

3. 道徳教育への期待

これまでの道徳教育は、学校教育全体、道徳の時間を要として、『心のノート』『私たちの道徳』の活用による充実を図ってきた。しかし、現状のままでは未来に不安が残る。そこで、「道徳習慣」を軸にして、副読本と『私たちの道徳』を子どもの側から再編することを提言したい。

現在,多くの学校では,それぞれ特色のある学校づくりが進められている。大分県では,先人に広瀬淡窓や福沢諭吉が出ており,彼らの思想を受けついで,掃除の大切さや心を込めてあいさつする,差別をしないなど,伝統やつつましい礼儀にもとづいた教育が息づいている。ただ,「大きな声であいさつしましょう」では,根無し草になってしまい,子どもの身につかない。礼儀の大切さやあいさつに心を込める意味を副読本で学んだ後,自分の言葉でまとめる役割が,『私たちの道徳』にはあることを見逃してはならない。

『私たちの道徳』には、「道徳習慣」を定着させる工夫も多く見られる。これをうまく授業と関連させて利用し、副読本の具体的な読み物資料と併用することで、自分には何ができるのか、教師や親が強制しなくとも、自分で考えて行動できる子どもたちを育てたい。

道徳の授業を変えれば、子どもが変わる。そして学校が変わる。そのきっかけとして、『私たちの道徳』を、現場の先生方がうまく活用することを期待している。

副読本と『私たちの道徳』の 調和と可能性

富山市立神通碧小学校教頭福田有児

■『私たちの道徳』の登場と副読本

昨年度末、『私たちの道徳』が現場に届いた。 慌ただしい時期のことである。『心のノート』か ら書名が変わったことと、冊数の確認ぐらいしか できていなかった。新年度になるまで、そのまま 書庫に入っていたという学校も多いのではないだ

4月になり、『私たちの道徳』を開き、「読み物 資料が入っているじゃないか」「副読本は、もう 買わなくてもいいのではないか」と思われた先生 も多いだろう。私の周りでも、このような声が聞 かれた。しかし、よく見てみると『私たちの道徳』 は. 一冊に12~13本の読み物資料しか載ってい ない。年間35時間の授業数から差し引いた分は、 学校独自で資料を用意して、授業を組み立てるこ とになる。さらに『私たちの道徳』は、2年間使 用するものである。このことに気がつくと、今度 は、副読本とどう併用していけばよいのだろうか、 という疑問がわき上がる。

授業がもう始まろうとしている4月である。管 理職として、早急に手を打たなければならない。

■副読本と『私たちの道徳』の関連

この2冊を上手に使用することによって、より 充実した道徳の授業展開が期待できるのではない かと考えた。その可能性を求めるために、道徳教 育推進教師を中心として、以下のように進めては どうだろうか。

①副読本の資料番号と,『私たちの道徳』のペー ジを対応させる。

まずは、副読本の資料を順番に読んでいき、『私 たちの道徳』の該当する内要項目のページを探し ていく作業が必要となる。その際、光文書院から 出されている「道徳の年間指導計画例」**を参考に するとよい。ここには、副読本の各資料に関連し た『私たちの道徳』のページ数がしっかりと記載 されている。

授業で使いやすいように、『私たちの道徳』に 副読本の資料番号などを記した付箋を貼っておく のもよい。付箋は2色用意して、赤は5年・青は 6年などと色を変えると、2年間の見通しがもち やすくなるだろう。

②授業の流れを多彩にイメージする。

この「道徳の年間指導計画例」には、2冊の効 果的な関連のさせ方の案も掲載されており、授業 の流れがイメージしやすい。一例を挙げると、副 読本『ゆたかな心』で深めた考えを『私たちの道 徳』のコラムを使って発展させ、さらに興味をも って学んでいったり、『私たちの道徳』の偉人の **言葉を、道徳の時間のまとめとして使うことによ** って、より自分事として、かみしめながら日々の 生活を送らせることができる。また、『私たちの 道徳』を導入として使って、副読本『ゆたかな心』 で考えを深めていくことも考えられる。発展では. 再び『私たちの道徳』に戻って読み物で見方を広 げたりするなど、その使い方は多彩である。

2冊の関連を模索して、より効果的な学習を創 造しようとすることが、道徳の授業の可能性を広 げていくことになる。実践をした後は、子どもの 心の動きと思考の流れを確かめ、より効果的な展 開を吟味していくことが大切である。

このように、副読本と『私たちの道徳』の調和 をさまざまに求めていくことが、新しい道徳の授 業を拓くことにつながるのではないだろうかと考 えている。学校全体で行う道徳教育のなかに、副 読本と『私たちの道徳』をどのように絡めていく のか、試行錯誤しながら、実践を積み重ねてほし い。それが道徳教育の充実につながるよう、フォ ローしていきたい。

※「道徳の年間指導計画例」(『私たちの道徳』との 関連つき」)は、光文書院webページから、ダウンロー ドしてご利用できます。

http://www.kobun.co.jp/dataroom/plan/index.html

『私たちの道徳』をこう活用する

群馬大学教育学部附属小学校 岡田 千穂



1. 『私たちの道徳』をどう活用するか

『私たちの道徳』の特徴の一つは、今まで書き 込みが主だった冊子に読み物資料が入ったことで ある。しかし、資料が載っているから扱うという 考え方では、日常とのつながりを目的とする『私 たちの道徳』の趣旨に反してしまうと思われる。 道徳の時間に何を学ぶのかを念頭に置いた上で、 その活用について考えていきたい。

2. 活用の実際

活用できる時間として、(1)事前指導、(2) 道徳の時間、(3)事後指導の3つが挙げられる。 活用の方法は授業のねらいにより異なるが、いく つか3年生を例に考えてみる。

※以下、ページ数の表記は、『わたしたちの道徳』(中学年)のページを示しています。

(1) 事前指導での活用

他教科や領域、行事等との関連を図る。

道徳の時間で学ぶことは、他教科や領域、行事等との関係が非常に深いことから、活動の振り返りとして活用する。事前に問題意識を高めておくことで、道徳の授業での問いが子ども自身のものとなる。また、事前に考えたことがどのように変わったか、あるいは深まったかが明確に意識でき、自身の学びを振り返ることができるようになる。【活用例】P.106 3-(2)自然愛、動植物愛護

理科で植物を育てた後、不思議だ、すばらしいなと思ったこと等を記述しておき、道徳の時間に 『ゆたかな心 3年』の読み物資料「植物のふしぎ」 を通して自然のすばらしさについて考える。

(2) 道徳の時間での活用

ねらいに基づき、活用したい部分をピックアップして授業を構成する。

『私たちの道徳』には、先人の言葉や美しい写真、子ども自身が考えられる問いが掲載されている。それらを道徳の時間の導入で活用し、言葉の意味や問いに対する答えを考えるという目的意識をもって資料に入り、終末で導入時に考えたことを振り返るという流れで活用する。

【活用例】P.33 ~ 37 1 - (3)正しい判断・勇気 ① 導入

P.33「勇気をもって行動しよう」の項目の中で、 勇気ある行動だと思うものに印をつけ、今の自分 の勇気に対する考えをはっきりさせる。

2 展開

資料「よわむし太郎」を読み、太郎はなぜ変わったかを考える。その変容の「もと」となる心は何かを考えることで、勇気がある人とはどのような心の人かを追究する。

③ 終末

P.33に戻り, 自分が印をつけた項目を見直して, 今ならどこに印をつけるか, そしてその理由について, 授業で学んだことをもとに考える。

(3) 事後指導での活用

発展的な活動として位置づける。

子どもたちが道徳の時間に学びを深め、「自分 たちの身の回りではどうだろうか」等の思いをも った後、事後活動のきっかけとして活用する。学 んだことをもとに考えられるようにするため、道 徳の時間のねらいに沿った内容を選定して活用す ることが大切である。

【活用例】P.136 4-(3) 家族愛

道徳の時間で、『ゆたかな心 3年』の読み物資料「お母さん、かぜでねこむ―ちびまる子ちゃん―」を通して家族について考えた後、自分自身を振り返って家族にインタビューする。

3. 「使用する」のではなく「活用する」

大切なのは、子どもたちが道徳の時間に何を学ぶのか、どのように日常に生かしていくのかを見通した上で活用することである。子どもたちに学んでほしいこと = ねらいがあり、そのねらいを達成するための学びの過程に『私たちの道徳』を位置づけていくのである。そのためにはねらいを明確にし、それに合わせた資料を選定したり、副読本と合わせて柔軟に活用したりすることが必要である。道徳の時間と日常の実践が響き合うよう、『私たちの道徳』をうまく活用していきたい。

道徳副読本と『私たちの道徳』との併用を考える

~それぞれの資料のよさを生かした道徳の授業~

神奈川県横須賀市立神明小学校 根本 哲弥



1. はじめに

「道徳の時間」が「特別の教科道徳」となるに あたり、学校現場では道徳についての関心が高ま っている。それとともに、新たに『私たちの道徳』 が配布されることになり、どのように教材を扱え ばよいか、混乱があることも感じられる。

道徳が特別の教科に変更になっても、授業を行 うにあたって大切なことは、教師の道徳的価値の 解釈と、それに基づいたねらいの設定であること に変わりはない。これらを教師が明確にして授業 に臨まないと、授業を受ける子どもたちは「授業 をしなくてもわかっている」「何を学んだかわか らない」といった感想をもってしまうこともある。

光文書院の指導書に書かれている【2. 主題設 定の理由 (1) ねらいの道徳的意味。(2) ねら いから見た児童の実態. (3) 資料の道徳的・教 育的意味】は、道徳的価値の解釈やねらいの設定 を考えるにあたり、大いにそれらの手助けになる。 以上を踏まえた上で、『私たちの道徳』と副読本『ゆ たかな心』の効果的な活用法を考えたい。

2. 『私たちの道徳』で広げ、副読本『ゆたかな心』 で深める

『私たちの道徳』は、「大切にしたいことをスロー ガンにしたもの」や「諺や偉人の言葉」「詩や物語 などの読み物資料 | 「自分の考えや活動したこと を記述する」などといった項目がある。これらを 学んでいくことにより、知識の広がりを期待する ことができる。それに加えて、道徳的価値の理解 を深めるためには、副読本の活用が大変効果的で ある。双方のよさを生かした活用例を模索したい。

3. 『私たちの道徳』と副読本『ゆたかな心』の 効果的な活用法を考える

(1)複数の資料によって理解を深める

道徳の授業は1時間1資料が一般的であるが. 複数の資料を用いることにより、同じ道徳的価値 について繰り返し学ぶことができ、知識として定 着したり、よさをさらに理解したりすることが可 能になる。理解が深まれば、自分もそうありたい という意欲につながっていく。

低学年の『わたしたちの道徳』P.75を見てみよう。

友じょうは よろこびを 二倍にし かなしみを 半分に する

一フリードリヒ・フォン・シラー

友情・助け合いに関する偉人の言葉である。こ れを授業の導入で紹介し「この言葉はどういう意 味だろう。今日はこの言葉の意味がもっとわかる ように『ぐみの木と小鳥』というお話から考えて みよう」と展開に入る。そして、副読本で道徳的 価値についての理解を深め、終末であらためてこ の言葉の意味を問うことによって、「たしかにその 通りだね」「資料と同じことを言っているようだ」 と理解の深まりが期待できる。スローガンについ ても同様である。『私たちの道徳』に書かれてい る言葉を導入に用いて、今日の学習の方向性を示 す。または、副読本で道徳的価値について理解さ せた上で、さらに終末で『私たちの道徳』にある スローガンを紹介し、子どもが学んだこととスロ ーガンを結びつけるという活用も効果的であろう。

(2)記述欄の活用によって資料と自分との共通点 を見つける

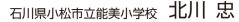
『私たちの道徳』には記述する欄がいくつもある。 低学年のP.66には.

お年よりには、どのような ことを すると よろこばれるでしょう。

というテーマの記述欄がある。これを導入で記 述させ、発表させると、行為は異なるであろうが、 もとにある思いやりの心は共通していることがわ かる。教師は「みんなが言ったことには、同じと ころがあるよ。その答えを探してみよう。」と促 して副読本を読む。思いやりの心を理解していく と、子どもから「先生、分かった! 僕たちが書 いたものにも同じ心があるね!」という発言が期 待でき、思いやりの心に基づいた自分たちの行為 を誇らしく思えるであろう。

以上のように、『私たちの道徳』と副読本『ゆた かな心』のよさを生かした活用法を考えてきたが、 今後のさらなる可能性についても探っていきたい。

情報モラルと道徳(4)~資料とのコラボを考える~





1 新情報モラル3年「個人情報の保護」

26年度版の『ゆたかな心』3年情報モラルは、 個人情報保護の取り扱いである。この年頃の子ど もでは友だちから聞いた家族の秘密をつい、悪気 なく人に漏らしてしまうことはあり得ないことで はない。これは「だれにも言わない」という約束 をしても、漏れた場合の事の重大さについて理解 していないことに起因する。また、他人事である ために深く考えていないという理由もあるだろう。 まさか秘密がその後独り歩きすることなど思いも しないのではないか。そこで、知り得た情報をむ やみに人に知らせることの危険性について考えさ せる機会をもつことは大切である。この個人情報 の保護について「約束」というキーワードを軸に 公徳心の資料とコラボさせてみることにした。

2 ねらい

- ◎約束を守り、友だちとの信頼関係を築く。
- ・約束を守らないと友だちが困ることがわかる。
- ・約束を守るといいことがあることに気づく。
- ・約束を守らないと自分が困ることがわかる。
- ・約束の意義が分かり、これからも約束を守ろう とする。

3 資料「やくそくだもん」と「ないしょの話」

まず初めに資料「やくそくだもん」を指導する。 ねらいとする内容項目は中学年の4-(1)規則尊重. 公徳心。「『公徳心』とは、公的な集団や社会の中 での約束やきまりの意義を認識し、それを大切に しようとする心である」(『道徳授業ハンドブック』 新宮弘識著 光文書院より引用) ゆえに、約束や きまりの意義を理解し、守ろうと努力する過程で 公徳心は育っていく。また約束は、きまりが公的 な了解事であるのに対し、私的な相互の了解事で ある。守らなくても法で罰せられることがないか もしれないが、お互いの信頼関係にひびが入るこ とになるだろう。本資料はお楽しみ会の準備を引 き受けた「高志」が、苦労してみんなとの約束を 果たすという内容である。この資料で前半部を指

導する。発問は「約束が守れなければどうなるか」 と「約束を守るとどうなるか」について自分と周 りの二つの側面から考えさせる。ただ、この資料は 約束を守った例を取り上げているので具体的には.

- ・もし帽子が間に合わなかったらクラスのみんな はどんな気持ちになるでしょう。
- ・みんなの喜んでいる様子を見た高志はどんな気 持ちになったでしょう。

発問はこの二つでよいかと思う。そして、約束 を守るには大変な場合もあるが、守れば自分も周 りもうれしくなることを確認しておく。ここまで を15分以内で通過したい。板書は二つの観点と二 つの側面を記録できるように上下左右に四分割さ れているとよいと思う。

次に情報モラル「ないしょの話」を指導する。 「たく」は友だちの「けいた」を信頼して家族の 秘密を話したが、けいたは軽い気持ちで学級新聞 の記事にしようとする、約束を破ってしまった資 料である。約束の内容が個人情報保護である。資 料では秘密の内容が明らかにされていないが、些 細なことであっても個人情報の流失がもたらす危 険性を考えさせるには都合のよい資料である。発 間は.

- ・もしこの新聞をみんなが見たとしたら困る人は いませんか。
- たくはけいたに対してどう思うでしょう

この二つ。子どもの考えは、前半の「守れなけ ればどうなるかしに追記する。この資料を合わせ て考えさせることで、前半の資料だけでは不十分 な部分,「約束を破られて困る人」の具体的な困 り具合について補填することができる。そして、 黒板の中心に「信じる心」と書き込み、約束の意 義を確認する。ここまでで35分である。

4 『わたしたちの道徳』との関連

最後に『わたしたちの道徳』の128ページで、「み んなが守らなくてはならないきまりがある」を確 認させて、約束も人と人とのきまりごとであるこ とを押さえて終末としてみたい。



道徳授業の「落とし穴」① ~「頭でっかち尻つぼみ」~

千葉大学教育学部特任教授 土田 雄一

1. 道徳授業の「落とし穴」から授業を見つめる

これまで、たくさんの道徳授業を参観してきたし、私自身もたくさんの道徳授業を行ってきた。「すばらしい!」と絶賛した授業もあれば、「もったいない」と感じた授業もある。そこで、本連載では、「もったいない」と感じた授業を分析し、「授業者が陥りやすいポイント(落とし穴)」として整理し、その対策を述べていきたい。

2. 道徳授業の「落とし穴」

- ①頭でっかち尻つぼみ。
- ②欲張りすぎて時間内に終わらない。

上の2点は、研究授業でありがちな「落とし穴」である。「導入を工夫」して、子どもの意識を引きつけようとするあまり、「出し過ぎ」「丁寧にやり過ぎ」等で、なかなか本題に入れない。「写真等の視覚資料を使う」「子どものアンケートを活用する」「クイズ形式で注目させる」「関連するこれまでの学習を振り返る」等々。それぞれ意図することはよいのだが、丁寧にやり過ぎて時間がなくなる、本題での深める時間がなくなる等の「落とし穴」に落ちてしまう。

pattern①「研究授業だから……」と, 丁寧にスター トしようとしすぎる

pattern② 導入に力をそそぎ過ぎる(準備しすぎ)

pattern③ 時間配分の見積もりが甘い

pattern④ 期待する子どもの反応がないため、教師がしゃべりすぎる(台本へのこだわり)

では、このような「落とし穴」に落ちないためにはどうしたらよいのだろうか。

3. 「落とし穴」対策

①「何を目指した授業なのか」考える

これは、道徳だけでなく、すべての教科にいえることである。「本時の授業は何を目指した授業か(ねらいの明確化と確認)」「考えさせたいのはどこか(中心場面の確認)」「そのために押さえておかなくてはいけないことは何か(前提の確認)」。授業の基本をしっかり確認したい。

②「ぜい肉」をそぎ落とす

導入が長い授業は、無駄が多い。「本当に必要か?」「子どもの意識の流れは?」「説明が長すぎないか?」等の観点から考える必要がある。

③「時間配分」をシミュレーションする

時々、指導案の段階で「この授業は45分で終わらない」と危惧するものに出会う。盛りだくさんなのだ。提示する資料が多い、書かせる活動が多い、グループワークが多い、動作化・役割演技等々。指導案上は、様々な工夫をしているように見えるが、実際には、やることが多すぎて時間がなくなり、「尻つぼみ」の授業になることが多い。対策として、授業の時間管理を「批判的思考でチェックする」ことを薦めたい。「本当にこれでよいか?」「必要か?」「終わるのか?」「捨てるとしたら何か?」等を検討しよう。

④「子どもの意識の流れ」を意識する

私が授業で大切にしているのは、「子どもの意識の流れ」である。子どもが導入から、資料提示、発問に対して、どのように受け止めて意識が流れていくのかを考えて授業を構成する。「時間だから」と子どもの意識の流れを分断するような授業はもったいない。(実はよくある。)何を削ればよかったのか検討したい。

⑤はじめから時間を延長する

「どれも必要、大切」と考えるなら、当初から時間を延長した授業構成にした方がよい。「45分の授業が60分」になるのと「60分の授業が60分」なのでは、子どもの意識も異なる。「時間を忘れて子どもたちが熱中した授業」を参観したこともあるが、まれであり、多くは教師の空回りである。計画段階での大胆な修正や発想の転換も考えたい。

4. 「落とし穴」に落ちたら

冒頭の「落とし穴」に落ちたらどうしたらよいか。「指導案を捨てよう」。授業の「ねらい」を確認して、そぎ落とす点を考える。中心発問と、子どもとのやりとりは極力確保する。考え抜いた「中心発問」が生きるように授業を再構成しよう。目標達成のためには「捨てる勇気」も必要である。



低学年の道徳授業

「おりがみめいじん」



筑波大学附属小学校 加藤 宣行

1. 資料について

本資料は、『ゆたかな心』 2年生版に収録されている、主に「勤勉・努力」という内容項目を学習するために書かれた資料である。

2. 本時のポイント

本時の授業展開は、次の5つの観点を意識して行った。というより、実は本時の授業を行ったあと、先生方に本時の授業を分析していただいた結果、このような「型」に行きついたというのが本当のところである。

- ①ぜひとも考えたいと思う問いをもつ
- ②問いに関して、自分なりの予想を立てる
- ③みんなが立てた予想を分類する
- ④予想を, 資料を読んで確かめる 子どもの反応を適切な言葉を使って意味づけする
 - I みんなが立てた予想を具体的に確認し合う
 - Ⅱ 予想以外の新しい考え方を見つける
- ⑤新しい考え方を自分の目標に照らし合わせて確 認し合う

3. 授業の実際

- (1) 資料名 「おりがみめいじん」 『ゆたかな心』光文書院
- (2) 内容項目 1-(2) 勤勉・努力
- (3) 本時の展開
- (『 』は教師 「 」は子ども)
- ①ぜひとも考えたいと思う問いをもつ

『今, 一生懸命がんばっていることはなんですか』 「なわとび」「ピアノ」

『もっと上手になりたいと思いませんか』 「思う」 『今日の勉強をすれば、きっと上手に、名人になることができると思います。名人になるための ひみつをゲットしましょう』

②問いに関して、自分なりの予想を立てる 『何かの名人になるために必要なことってなんで しょう』

「いっぱい練習すること」

「コツコツと努力する」

「好きになる」

「あきらめない」

「名人を目指してがんばる |

③みんなが立てた予想を分類する

『「いっぱい練習」と「コツコツ努力」は同じ仲間ですね。これをAとしましょう』

『「好きになる」はまたちょっと違うね。Bとしましょう』

『「あきらめない」これも大切ですね。Cとしま しょう!

『「名人を目指して」なるほどこれもいいですね。 Dとしましょう』

『他にはないかな。今日の勉強をすれば、Eを見つけられるかもしれないよ。ではお話を読みます』

④予想を、資料を読んで確かめる

『みんなが考えた $A \sim D$ は、この話の中にあったかな』

「あった、Aはたくさんあった」

「Cは最初からあったんじゃないかな」

『なるほど、この子は最初からおりがみが上手で、好きだったというわけだ。ということは、普通に折ってもOKだった。(ここで普通に折った鶴の折り紙を提示し、黒板に貼る。)だけど、飛ぶようにできないかなと、上を目指して折った。これがDですね。(ここで、飛ぶ鶴の折り紙を提示し、実際に動かしてみせる)』

「すごい!」(いっせいに子どもたちから歓声が上がる)

☆板書の工夫

ここで、写真のように普通に折った鶴と工夫を して折った飛ぶ鶴を対比的に提示し、その違いが 視覚的に一目瞭然となるようにする。

このことにより、子どもたちは名人の上があることに気づき、より高みを目指して努力することの意味を考え始めるようになる。



⑤新しい考え方を自分の目標に照らし合わせて確認し合う

『すごいね! このすごいに行くためには, みん なが見つけたABCDの4つプラス, Eのがんば りがありそうだよ』

「ただ折るのではなく、ていねいに折る」

「でもさ、失敗したり、これでいいのかなあって 悩みながら進んでいるから、真っ直ぐな線では ないんじゃないかな」

『なるほど。じゃあ、階段にしようか。階段を上っていくけれど、たまに足踏みすることもある よね。それは無駄な時間なのかな』

「そういう時間も必要だと思う」

☆子どもの発言の真意を汲み取る

このようなやりとりは、ちょっと油断すると聞き流してしまうような、通りのよい発言であるが、よく考えると大変深い。努力というのは、やみくもに突っ走ることではなく、目的意識をもち、一つ一つの意味をよく考え、振り返りつつ、着実に進むということである。そのような過程で起こる失敗は、次につながるよい失敗となるであろう。

『なるほどなあ, そうすると, 「これでいいのかなあ」って悩むことは悪いことではないのですね』

「うん、いいことだね」

さて、ここまで授業を追ってきて、⑥があることに気づいた。

それが次のようなものである。

⑥自分たちが学んだことを実生活にあてはめて考え、これからの生活に希望をもつ。(よりよい価値観への変容を実感する。)

『そのようなEのがんばりがありそうですね。』 「目標をもって、みんなのために一生懸命、考え ながら気持ちを込める」

『そのような、【いい努力】をすると、どんないいことが待っているでしょう』

「自分の力でやったという達成感がある」

「すごい人になれる」

「レベルアップできる」

「名人から達人へ!」

4. 授業後の考察

「がんばればできるようになる」などというような、誰でもわかっているつもりのことを改めて考え直す。少々大げさに言えば、がんばることの意味を、自分たちで予想を立て、それを検証していくようにするのである。そうすることによって、子どもたちは「ああ、そういうことか」と、自分の中で納得しながら、主体的に価値を自覚し獲得するようになる。

このように、道徳の時間は、授業の中で外からの押しつけではなく、内面からみなぎってくるような高揚感を味わわせることができたらいいと思う。子どもたちは自らよりよい方向を見出していく主体となるであろう。

実際、本時でもそのような動きがたくさん見られた。語呂合わせの洒落のようだが、「『Eの努力(いい努力)』をしたら、どんないいことが起きるだろう」というような、自分たちが見つけた努力の秘密を明らかにし、それを用いて努力を続けると、どんなに明るい未来が待っているかを、希望をもって語っている。

「すごい人になれる」「名人から達人へ!」などという言葉に実感がこもり、重みが増す。借り物の言わされた言葉ではなく、子どもたち自らが選択し、納得した言葉になるのである。ここにおいて、子どもたちの言葉は力をもち、美辞麗句ではなくなるのである。